

趙孟頫「水村図」に関する基礎的考察

西尾歩（立命館大学 非常勤講師）

「水村図」（紙本墨画、24.9×120.5cm、北京・故宫博物院蔵）は趙孟頫(1254～1322)の山水画で、画面上に水村図という題と、大徳六年(1302)十一月望日に、錢徳鈞なる人物の為に作ったという款記が書される。遠くに横たわる山並みを望む茫漠と広がった水辺の景觀の中、林木が散在する間の所々に民家があり、村人の活動や水鳥の飛翔も表される。本画卷には、趙孟頫の再跋や、画を得た錢徳鈞による題跋を始めとして元代の四十数名による跋、明末の董其昌、陳繼儒、李日華、李永昌、および清の乾隆帝の跋がある。

本図に関しては近現代の美術史研究において多く言及されているが、概ね諸跋の意見を踏襲し、趙孟頫の代表作あるいは基準作とし、江南系山水画の元代初期における重要な事例とみなす。(例えば、李錡晋氏の「鵲華秋色」に関する論考(1965)や、近年では、メトロポリタン美術館の展覧会図録 *The World of Kubilai Khan* (2010) 中の Maxwell K. Hearn 氏の“Painting and Calligraphy under the Mongols”等において。) 本発表では、看過されてきた諸問題を提示・整理して、本図の基礎的考察を試み、さらに実景表現の可能性について論じたい。

まず、本紙と併せて基礎資料とすべき跋の現状確認から始める。展示された状態で目視で判断できる限り短長様々の二十紙が跋として本紙の後に継がれる。詳しく調べてみると、書写年代が巻内で前後していたり、紙単位で異なった数種類の書風が認められる。また、『珊瑚木難』などの明清の文献には、今の跋には無い跋が著録されていたり、文字の異同があったりするので、本図が再表装された際の錯簡や、当初の跋が写しに差し替えられた可能性がある。これらのことを認識した上で、原初の様子を復元的に理解する必要がある。

続いて、本図に画かれた場所および表現内容の検討を行う。跋で錢徳鈞が述べるように、太湖東南に位置する分湖の辺りが画かれているとする意見と、李日華跋にあるように、本図のような景觀は江南地方にはどこにでもある景色なのでそうとも言えないだろうとする意見がある。これらに対して、発表者は、呉興(現、湖州市)から西を眺めた様子と本図が似ていることを示し、趙孟頫の出身地でもあるその地の景觀が画かれた可能性を提示する。そして、南宋時代には杭州の実景を元にして作られた趙伯驩「万松金闕図」があったこと(『美術史』第163冊所収拙稿参照)や、趙孟頫自身の文集『松雪齋文集』卷七所載「呉興山水清遠図記」によって明らかな呉興南方近郊の山々を画いた絵画があった事実、および、『文集』所載「遊弁山」詩等に込められた山水への思いを併せて、本図の表現内容を確認する。

以上でみてきたように、跋が取り替えられているのであれば、本紙が模写に取り替えられている可能性も考慮せざるを得ないが、一方では、趙孟頫が画くにふさわしい主題が本図に表されていることも確認できる。本発表では、至元二年(1265)の馮道真墓北壁山水画など基準となる諸作品の表現形式を分析・総合し、本図の中国絵画史における位置を考察する。